



マックス・シェーラーの教育哲学的研究 - 「調和と人間形成」の問題を中心に -

著者	盛下 真優子
号	18
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	教博第195号
URL	http://hdl.handle.net/10097/00122909

盛下真優子

准教授 池 尾 恭 一

＜論文内容の要旨＞

第2章「人間形成における無限性と有限性—精神と生の調和—」では、シェーラーがその

後期思想で展開した哲学的人間学を基調に、人間形成の内包する「精神と生の調和」という問題が検討される。論者によると、シェーラーでは人間の特殊性が精神による生の対象化のうちに措定されている（「世界開放性」）が、その一方で、人間とはたえず生命的現実に縛られそこへ引き戻される者であるとされている。世界へ自己を有限的に開く精神と生とのこの相互作用こそが両者の調和的關係、ひいては人間形成の原理をなすものである。

第3章「世界過程における神生成と人間生成—神と人間との調和—」では、シェーラーにおける「神と人間の調和」という問題が考察され、（1）自己の生を対象化しうる人間は、その存在根拠としての神の存在にも気付くが、この神は完成された神ではなく、人間の生成に依存して生成する神にはかならない、（2）神生成と人間生成は、世界過程において連帶的・調和的關係を有するものであり、神及び人間の両者は、相互依存的・独立的にみずからを形成していくものである、（3）ここから導き出されうるのは、神の共同形成者たる人間の自己形成という思想であるが、そうした思想は、シェーラーの「価値の形而上学」とも根本的に連係している、と論定される。

第4章「人間形成における知—支配知・教養知・救済知の調和—」では、シェーラーの知識社会学において提示・論究されている「支配知」、「教養知」（「本質知」）及び「救済知」といった三つの知識形態について検討される。論者によると、人間形成において三つの知識の調和的關係を可能にするのは、シェーラーの説く「機能化」の働きにかならない。救済知をとおしてみずからの使命を自覚するとともに、支配知における「いま—ここ」の現実へとたえず立ち返り、そこから、本質知を洞察しこれを新たな構造に組み込む（教養知）機能化が、人間形成における動的な知識連関を可能にする。

第1章は道徳的形成について、また第2章～第4章は主として精神的形成について考察しているが、第5章「人間形成における愛の作用—道徳的形成と精神的形成の調和—」は、道徳的形成と精神的形成を統合する「愛」の作用について検討している。論者によると、シェーラーの説く愛とは価値を発見する働きであるのみならず、すべての精神的作用に先立って、道徳的形成・精神的形成の両者を統合していく働きでもあるが、そうした愛は、人間形成のうちで価値の先取規則たる「愛の秩序」として具現され、さらに又、衝動的生によってそのつど制約されている作用を含意している。こうした愛が「人格愛」というかたちで他の人格へ向けられる場合、その働きは、「存在肯定」＝「形成可能性」となって人間形成を促進することになる。

第6章・第7章は人間形成に対する「他者」の意義について探究し、そこから、「調和と人間形成」の問題へのさらに立ち入った省察を試みている。

まず、第6章「人間形成と典型—調和における典型の存在—」では、シェーラーの説く「典型」がテーマとして取り上げられ、（1）典型とは「汝があるところのものになれ」との言い方で、人格愛が他者に及ぶことを促進していく存在である、（2）各人が自己自身の典型へと自律的に追従することが、調和にとって本質的な「個別独自の形成」を可能にする、と論定される。次いで、第7章「他者との共同感情を通じた調和—その限界と可能性—」では、シェーラーの「共同感情」論に即して、他者と調和的に生きるということが人間形成論的に検討され、（1）真に他者と共に歎び悲しむことは、他者の「わからなさ」と呼ばれる現象

を伴っているものである、(2) これをあるがままに受容するところから、他者との調和の限界と可能性が明らかになってくる、と論定される。

「人間形成における調和」と題する終章は、以上の各章での論点をふまえながら、人間形成における調和のあり方を教育哲学的に考察している。

論者によると、シェーラーの説く調和とはアプリアリで本質的な「絶対的価値領域」を前提とするものであるが、これに基づく各人の人間形成での価値実現には、他者の価値実現との相互否定関係に陥らざるをえないといった、一種の「悲劇的現象」が付き纏う。この悲劇的現象を契機として絶対的価値領域に、すなわち「他なるもの」の存在に目覚めるとともに、そこへと開かれつつ自己を形成する行為こそが、人間形成における調和をも招来するものである。敷衍すれば、互いの「理解しえない／理解されえない」関係を積極的に受容することで、悲劇的調和を他者と共に生きていくこと、またこの積極的受容の限界というわれわれの「有限性」を自覚することで、有限性をいわば有限的に生きていくこと、そうした行為が根源的次元での他者との調和を実現させることになる。

＜論文審査の結果の要旨＞

教育的現象の多様化とこれに伴う教育諸科学の専門化が進むなかで、今日の教育哲学は、教育と呼ばれてきた事象を広く「人間形成」として捉え直す傾向にある。たとえば、わが国の代表的な教育哲学研究者の一人である細谷恒夫は、その著作『教育の哲学』（1962年）において、従来の教育哲学に共通の動向、すなわち「教育目的論」または「教育理念論」への自己限定を省みたうえで、「人間形成の基礎理論」（人間形成論）という教育哲学の新たなあり方を提唱している。細谷によると、教育的現象はそれ自体の人間形成的意味によって教育的なのであり、したがってそれは、教育目的や教育理念に対する意識に制約されえないものである。本論文は、教育哲学研究の置かれているこのような状況をもふまえながら、「調和と人間形成」の問題をシェーラーの哲学に即して究明し、これによって人間形成論研究の新たな可能性を提示している。その考察対象は、「調和と人間形成」にかかわるシェーラー哲学のさまざまな位相、すなわち倫理学、哲学的人間学、形而上学、知識社会学、自他関係論といったきわめて広汎な領域にわたるものである。

こうした研究は、これまでの教育哲学研究には見られない独創性を有している。教育哲学、とりわけ人間形成論に対するシェーラーの哲学の意義については、わが国においてはもちろん、ドイツでもいまだ原理的・全体的には十分に研究されていないのが実情であり、この点で本論文は教育哲学研究、ひいては人間形成論研究に対して多大な貢献をなすものである。

さて、本論文のようにいかなる教育論をも展開していない哲学者を教育哲学（人間形成論）的に研究する場合、回避されねばならないのは、その哲学思想をすでに完成されたひとつの体系として理解したうえで、それが提示する本質理論を教育的現実の諸問題に対して適用していく、ということである。しかしながら、一方、教育的現実とそこへの実践的関与にのみ研究を方向づけていくならば、そこで取り扱われる哲学思想を恣意的に歪曲してしまう危険

性がある。その点で、シェーラー研究に伴うこのディレンマをも十分に自覚しながら、シェーラーの諸著作及び多くの関連文献を精緻に探査・読解し、人間形成における調和の意味を多角的・重層的に解明した本論文は、未熟ではあるものの、全体としてみるならばきわめて意欲的な研究であるといえる。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として合格と認める。